

English Garden 第62話

"

"The Time is a great author; always writes Perfect Ending."
Charles Chaplin

「時間というものは偉大な作家だ。いつでも完全な結びをつける」 チャールズ・チャップリン

チャップリンの最後の作品"Limelight"('ライムライト'1952年)の中の一節です。この作品は原作・監督・主演・作曲すべてチャップリンで、原作に2年半、作曲に9ヶ月かかっています。(訳は『キネマ旬報』昭和28年2月下旬号掲載のシナリオによる)

チャップリンの話が何回か続きましたが、今回はしめくりとして、昨年11月に亡くなった映画評論家の淀川長治さんに関連してお伝えします。淀川さんは幼いときからチャップリンをこよなく愛し、自伝や映画に関する著作の中でも折にふれてチャップリンのことを語っています。

自伝によると、淀川さんは幼いころから映画にのめり込み、10歳のときにはもう「生涯を映画で生き抜こう」と決心していたそうです。

淀川さんがチャップリンに初めて会ったのは昭和11年(1936年)、チャップリンが女優のポーレット・ゴダードと結婚し、日本へ船でハネムーンにやってきたときでした。ユナイテッド・アーチスト大阪支社に勤めていた淀川さんは26歳、月日に神戸に着くという電報を受け取りましたが、極秘なので絶対に行くなと支配人から命令されました。しかし、「何としても会いに行く」という決意は固く、支配人もどうも黙認してくれ、船長からもデッキで3分間という許可をもらいました。いよいよチャップリンが現れると、淀川さんは「あなたの映画は子どものときから全部見えています」という意味で、あらんかぎりのチャップリンの映画の題名を並べ、本当に見ていることを証明するためにチャップリンの演技の真似もしてみせたということです。チャップリンは喜んで自分の船室に招き入れ、40分も映画について話し合ってくれました！



淀川さんが2度目にチャップリンに会ったのは15年後の昭和26年(1951年)12月、「ライムライト」撮影中のスタジオでした。この物語の舞台は1917年のロンドン。チャップリンの扮するかつての人気喜劇役者カルヴェロは、自殺しようとしたバレリーナ志望の娘テリイをたまたま救ったことからお互いに愛し合うようになりますが、娘のためを思って身を引く決心をし、テリイを愛している青年音楽家ネヴィルに委ねて姿を隠します。(淀川さんが見学したのは、次のシーンです。)時が経ち、辻音楽師に成り下がったカルヴェロは、町のカフェで帽子を手にして客から小銭を集めて回っていると、軍服姿のネヴィルに出会います。短いセリフのやりとりのあと、カルヴェロは青年と向かい合って静かに椅子にすわりました。

カルヴェロ「テリイはどうしてます」
ネヴィル「あんたが出ていってから、彼女はだいが苦しんでいた」
カルヴェロ「だが、今はいいんでしょう？」
ネヴィル「そう...大陸を廻っていたが、帰ってから元気です」

...そのあとカルヴェロは、表題のせりふを思いをこめていうのです。「結構...結局そうなるだろうと思っていた。時間というものは偉大な作家だ。いつでも完全な結びをつける」。チャップリンのせりふはまるで詩を歌っているようだった、と淀川さんは書いています。初めは声高く、次は低く、何回もこのせりふを繰り返す、やっと6回目くらいに「あっ、これでいい」といって両手を合わせて喜んだそうです。

チャップリンが一つのせりふ、一瞬の演技に精魂をこめているのを見て、淀川さんの目から涙が溢れてきました。撮影が終わって、チャップリンは近づいてくると、なぜ泣いているの、と尋ねるような表情を見せました。あわてた淀川さんの口からとっさに出たのは「あなたの白い髪...タイム...」という単語だけでしたが、気持ちは伝わったのでしょうか、チャップリンは「お会いできて嬉しい」といいながら、両手を抱きしめてくれました。淀川さんは感激しながら、15年前に神戸で会ったことを話しますと、「おー、あのときの少年でしたか。覚えてますとも」。淀川さんのひたむきさに、チャップリンも心を打たれたにちがいないと述べています。

日経新聞に連載された「私の履歴書」をまとめた『「生きる」という贅沢』と題する著書(日本経済新聞社発行)の中で、淀川さんはしめくりのようにいっています。

「悲しいことを忘れるほど私は嬉しいことがいっぱいまで生きてきた。嬉しいことがなくなったら人生の終わり。植木鉢の花がまた咲いた。これだって嬉しい。人生は何か。人間の使命は何か。そんなむづかしいことを考えなくとも互いに『嬉しかったなあ』と言い合える社会が一番幸せ」
あ、人なつっこい笑顔が目には浮かびます。ご冥福をお祈りいたします。